

映画「危険なメソッド」から読み解く治すことの意味

—心理療法の陥穽とフェミニズムの利点—

井原成男 小玉亮子

I. はじめに

映画「危険なメソッド」は、精神分析が次第に治療の主流から外れ、せいぜい、対人関係療法（水島、2010など）の中にその影を残すのみというCBT（認知行動療法）花盛りの中にあって^{注1}、人が人を治療するとは何かを根源的に問う希有の作品である。この作品は、精神分析の黎明期を取り扱っており、今では、精神分析と分析心理学として、まったく異なる技術と治療観（あるいは人間観）を持つ学派として認知されているが、それらがまだ十分に分化していない時代を背景に持ち、同じ精神分析として同一視されている。それ故に返って、根本の問題があらわになっている第一級の素材である。

これはまた、筆者が目指す、これまでの臨床心理学（公式には心理臨床学、この用語も様々な政治的対立の手垢のついた用語であり、日本の臨床心理学の恥部を語らねばならぬので、使いたくないが）その歴史と積み重ねの延長線上に、心理療法のDomesticな統合を試みる（井原、2014）思いを刺激する。

本論は、映画をもとにその中に心理療法論の本質とも言うべき部分に焦点を当ててコメントし、それをこれまでの心理療法論やフェミニズム論から深化させ論考したい。その中でも、この論文の中心となるのは臨床心理学と社会学の対話である。

II. 映画の概要とその理解

この映画は多くの人が視聴しているが、見ていない人のために概要と、そこから筆者が汲み取った理解を述べておく。

1904年、スイス・チューリッヒの病院に18歳の女性ザビーナ・シュピールライン Sabina Spierlein が運ばれてくる。ヒステリー症状をあらわにするザビーナは精神的問題を抱えていた。治療担当は、若き精神科医ユング Jung。精神分析学の創始者フロイト Freud の理論に刺激を受けていたユングは、フロイトの提唱する「談話療法」をザビーナに試みる。

ザビーナは治療を拒絶したが、次第にユングの問いかけに応じ、幼少期の父親との関係に原因のあることが判明。4歳の時に初めて父親にぶたれたというザビーナは、極度の恐怖におののきながら、折檻のたびに興奮した。明らかになったザビーナの心の病と幼少時の性的トラウマの関連は、フロイトの精神分析理論と合致していた。

「私は不道徳で、汚らわしく、墮落している」というザビーナは、研究を手伝いながら鋭い見方を披露し、ユングを驚かせる。

ウィーンでユングは、フロイトと初めての対面を果たす。劇的に症状が改善したザビーナについて意見交換した二人は、真夜中まで13時間も熱く語り合う。ユングは医学部で勉学に励むザビーナと、医師と患者以上の親密な関係を育んでいく。

フロイトの紹介患者グロスGrossは薬物に溺れ、一夫一婦制を否定する快樂主義者だった。グロスに衝撃を受けたユングの心の奥底に、ザビーナに対する欲望がくすぶる。グロスは姿をくرامますが、ユングは意を決し、ザビーナの自宅に足を向ける。ザビーナにとってユングは初めての男性だった。

情事を重ねるユングとフロイトとの関係には亀裂が生じつつあった。頑なに性に執着するフロイトと、人間の無意識の中により大きな可能性を求め、神秘主義的に傾倒するユングの考え方とは、相容れなくなる。苦しむユングは、断腸の思いでザビーナとの関係に終止符を打つ。ユングからの別れの言葉を聞いたザビーナは激高し、ユングのオフィスを立ち去る。

病院を辞めて独立したユングは、フロイトとの決別か、ザビーナとの愛を断ち切るのか。ザビーナと再会したユングは、彼女とのセックスに身を焦がし「全てを捨て、君と消えたい」と吐露する。このときすでに、危険なメソッドは幕引きを運命づけられていた。

(映画 危険なメソッド パンフレットより 抜粋)

映画に対する理解

映画はザビーナがウィーンのブルクヘルツリ病院に入院するところから始まる。この病院は高名な精神科医、ブローラーの指導のもと、ユングやピンスワンガーなど後に名をなす精神科医を擁し、当時としては革新的な治療を試み始めていた。

キーラ・ナイトレイ演じるザビーナの野獸的な興奮状態は、自身、顔が歪むほどの名演技で、背景に移るスイスの風光明媚な自然と対比的に、ザビーナの特徴や人間に潜む野獸性と、逆に率直な清らかさを暗示する。

この病院で、治療的野心に燃えるユングがザビーナの主治医になる。周囲やユングに対して不信を持ち、決して依存しないが、それは精神療法の発展した今日の見れば、周囲への不信であるとともに、父への不信を表している。ユングも、現代の技法から見れば、乱暴ともいえる介入法でザビーナの心の中に入っていく。これはフロイトが、ブローラーと2人で開発した、お話によって抑圧されたものを、いわば「煙突掃除」する、トーキング・キュアである。

熱心なユングの治療に応じ、やがてザビーナはユングとの間に実父への愛と憎しみを再演していく。今日の理解から言えば、転移が展開され、次第にユングの逆転移が首をもたげるのである。

この頃ユングは、無意識の存在に気づき始めていた。それはユングが、無意識をむき出しにする統合失調症の患者を多く診ていた体験によると思われるが、ユングは無意識を、夢の分析という形で著作にしていたフロイトに引かれ、我が師と定めていくのである。

映画のセットの中でも、フロイトの部屋の狭さが強調され、窮屈さと保守的なフロイトの姿が際立つ。フロイトはユング来訪のお返しとしてユングの館を訪ねるが、その空間の開放性にはフロイトのみでなく我々も驚く。閉鎖的で頑ななフロイトとユングの環境と性格の違いは、そもそものはじめから将来の決別を予感させる。ウィーンの開塞性とスイスの開放性もしかりである。

しかし、フロイトはその違いを無視してまで、ユングを後継者にしたかった。やがてくる、ナチスのユダヤ人殲滅の時代を前にして、フロイトは、自分の創設した精神分析学を、ユダヤ人のうさんくさいグループに閉じ込めて理解されるのを恐れていた (Said, 2003)。そのためにフロイトは聡明で生粋のアー

リア人であるユングを後継者に据えることで、精神分析運動の普遍化を目指したのである。

その際フロイトにあった、運動の中に持ちこむことを許せない世界を、ユングは資質として持っていた。それは今日から見れば無意識に身を委ね、無意識をフロイトが考えるよりももっと大きなもの、いわば心の原初的な発動の基盤として見るユングと、精神分析を普遍化するため、オカルトや非科学的なものに見られることを恐れるフロイトとの、人種的問題も絡んだ立場性の違いであった^{注4)}。

この違いは、やがて2人の関係の破綻を来す。それは映画の場面にもでてくるように、ユングが、家の家具に亀裂が入り、大きな音がすると予言する場面に象徴的に示される。大きな亀裂の入る音はユングの予言通りに2度も起こるが、フロイトは、単なる偶然にすぎないとして、彼の唯物論や無神論を押し通した。フロイトのこうした生理学重視の汎性欲論と無神論また科学主義と、無意識を普遍的無意識という深みから捉え、汎性欲論＝生理学を超えたものとして精神分析を發展させていこうとするユングが、協調していけるはずもなかった。これが公式的な決別の原因とされる。

しかし、この決裂の陰には、ザビーナを巡る秘密の三角関係が潜んでいたというのが、Carotenuto (1980)の意見である。それは近年、ジュネーブ心理学研究所跡地地下室から発見された、ザビーナがユングと交わした私的な文書の発見による。

フロイトは通常、彼の汎性欲説から誤解されがちな性に奔放な人ではなかった。妻マルター筋の人である。しかしユングは、根本的に、一夫多妻の考えを容認し、それを実践した。やがて、ザビーナ自身がユングとの性的関係をフロイトに相談したことをきっかけに、科学観と人間観の違いに加えて、フロイトとユングの決別に拍車がかかっていく。フロイトは妻中心主義者、いわば一穴主義者であり、ユングの女性との関係を許せず、また理解できなかった。

映画には、グロスという分析家にして性の解放論者が登場し、ユングに「馬に水を飲ませるのも忘れないように」と生理的欲求をごまかさずに教唆し、ユングの中にザビーナ（患者）との欲望の解放に進ませるという場面、きっかけが出てくる。ユングに性的関係を迫るザビーナの誘惑に打ち勝てず、またグロスにそそのかされて、ユングはザビーナのアパートを訪れ、関係を結んでしまう。

父への愛が父の折檻とない交ぜになったザビーナのために、ザビーナの手を縛り、お尻を笞で叩き、興奮させて、行為に及ぶというこの場面は、普通に見るとエログロの場面であり、この場面に対してであろうか、ユング派の人からは、嫌悪感さえ出されたという。しかし、それは間違っており、この時期がまだ精神療法の黎明期であり、後の転移－逆転移関係への無知から批判するのも反論するのも同じく的をえていない。

しかし、ザビーナの情熱と、グロスの唆しによって、性的関係が生じたとする、この場面へのユングとザビーナの関係解釈は、クロンバーグ監督には悪いが、浅薄な解釈である。その他にもこの映画には、ユングの子を持つことはできないと諦めたザビーナが、医者でロシア人のシェフトルと結婚、妊娠し大きなおなかを抱えて、ユングの妻エマに会いに来る場面が出てくるが、事実をもっとドロドロとしたものであり、性的関係に対する美化であると思われる。ただ、おそらくクロンバーグの解釈は、社会通念を超えたものが真の愛であり、治療という行為は科学や医学を超えた人間的で純粋なものを発動させるものであるというものだから、この場面は全体としての統一感、映画の完成度を乱すものではない、が。

エマが、映画の中で「私の夫を好きにならない女性はいない」と語るように、ユングの高弟たちは、その多くが元患者であり、彼女達を治療者や研究者にすることで、彼女達の病気を回復させているのである。

自分の中にある才能をユングに発見され、ザビーナは医学の道に進む。彼女の学位論文を指導したのもユングであった。一度はザビーナと別れたユングも、ザビーナの純粋性に再び、今度は自己決意を持って、ザビーナとの関係を復活させる。ユングにとって、ザビーナはかけがえのない女性（まさに女神としての

グレート・マザー) になりつつあり、自分を見捨てなでくれと、ザビーナにしがみつくまでになっている。

トニー・ヴォルフ Tonie Wolf に至っては、恋人として、ユング家に同居することを、エマに承諾させており、こういってよければ、女性の隠された才能を知的に引き出していく天性の才能を持っていた。

映画はそのことを語っていないが、筆者は、ユングの女性関係が、知的なものに留まらなかったのは、ユングの母エミーリエが、グレート・マザー（原始太母）であり、さらにユングが青年期に、この人と結婚するというインスピレーションを得た女性なのに、エマは、いわば彼を安定させるだけの凡庸な女性であり、ブライスヴェルグという霊媒者の一家の血を引く、ユングの母方の系譜が持つ神秘主義や直感能力、あややかな創造性は持っていなかった。ユングは、ザビーナのもつグレート・マザー性に惹かれ、エマに癒しと安定、ザビーナに悪魔的な創造性と直感能力という両面を望まずにはいられない、女性への希求を持っていた。

この神秘的で直感的な能力と創造性は、例えばザロメなどのように男性の能力や創造性に火をつける、それがザビーナであった。

しかし、その意味ではユングを誘惑した女性として卑俗にも描かれるザビーナは (Alnaes, 1994) 率直に直線的であり、引き返すことを望まない、そういう意味で、適応主義的な治療論から見れば病気の女性であった。

ユングは、スイスで有数の資産家であるエマとの婚姻もあり、またブルクヘルツリ病院という、日本でいえば国立大学精神科医長のような社会的地位を持つ人、適応した人であった。彼は、ザビーナを裏切った、あるいは、その直進性については行けなかった。

やがて、ザビーナの両親がユングと娘との関係を知るに及んで、またユングの妻エマが、フロイトにこの事実を明かす手紙を書き送ったことによって、事態は急展開と終わりを迎える。両親からの訴えに対して、ユングが、治療費はもらっていないから患者ではないと自己弁護したことに怒ったザビーナは、ユングの診療室を訪ね、治療費を叩き付け、ユングをなじりつつ去っていく。

後にザビーナは、フロイトのもとに学び、精神分析家になり、また、ピアジェを治療しつつも自身、影響され、児童の学校を作るフェミニストにして社会事業家となっていく。このことについては、考察とともに、後に論じる。

Ⅲ 質問に答えて

この部分は、先にのべた研究会で、映画鑑賞の後に、小玉の質問に井原が答えるというトークのかたちで行われた。できるだけ会場の雰囲気が出るよう描かれている。斜体が小玉の質問、一以下が井原の答えた部分である。

1. 映画に出てくる台詞で注目すべきものがありましたら、教えて下さい。

—結構、事実に基づいて描かれているので、問題意識によっていろいろであるが、個人的には、フロイトがブルクヘルツリのある女性患者を「典型的な色情狂だ」と診断する台詞と、ユングがザビーナに「自分が病気でなければ患者を治せない (Spiegelman, 1992)」というところである。

2. 「談話療法」「言語連想テスト」についての概説をしてください。

—「談話療法 talking cure」はフロイトとプロイアーの患者、O・アンナ（実は後にドイツの切手になる著名な女性社会事業家であるベルタ・パッペンハイム）にお話をさせると症状が消えることに気付いた

のを、ベルタ自身が、そう呼んだ。彼女はまたこれを「煙突掃除療法」とも呼んだ。鬱積した感情を排出するカタルシス療法であり、今日では厳密には精神分析とは言えない。

「言語連想テスト」は、100語からなる単語集、たとえば女、生む、持続などについて連想する言語を答えてもらい、発語内容と発語までの時間を記入する。100語が終わった後で、最初からそれと同じ言語を答えてもらう、2回目に著しく反応時間や内容が異なる場合、そこに患者のコンプレックスが絡んでいると考え、分析していくという方法である。

3. 「言語連想テスト」といった方法は、現在でも臨床場面で利用されているのでしょうか？

—ユング研究所では、「言語連想テスト」を最近まで訓練生に対して最初にとるとききが、現時点でも使われているかは不明である。ユングは様々な例を挙げて、「言語連想的診断法」という本を書いている。ユング心理学の出発点をなす技法である。

「言語連想テスト」の発展形態が現在のSCT(文章完成法)である。このテストは問診代わりに比較的よく使われている。患者の意識的な部分をよくつかむ。たとえば、「私は小さい頃〜」「私の母は〜」「私の父は〜」などの〜の部分に文章を付けくわえる。例えば腎臓病の子が、「私は小さい頃体が小さかったが、今でも小さい」「私の母がもっと優しくしたらよかった」、「私の父は仏様と呼ばれていた」などと書かれる(井原, 2001)。

4. 「転移・逆転移」は現実に、臨床場面で、今でも問題を出現させているのですか？

—女性患者が自分に向ける転移に手を焼いたフロイトは、これをマイナスと考え、自己分析を受け、自分自身を知ることで、転移に対応した逆転移を防ぐとし、その意識化を訓練の重要部分に組み込んだ。

しかしその後、クライン Klein は、転移と逆転移を深きコミュニケーションと捉える視点を発展させた(Likerman, 2001)。「投影性同一化」という用語の示す内容がそれである。例えばある境界例の患者が表面、丁寧に優しいのに、その人との面接の後、怒りがわき上がってくる時、それは患者が意識せずスプリットした感情なのではないかと考え、患者理解の手がかりとするものである。転移-逆転移は病理の深い患者を相手にするときは必ず意識している必要があり、これをきちんと処理しないと、例えば若き精神科医などは「私はこの人を治すために生まれてきた」と感じ、また患者(女性)は「この先生に出会うために生まれてきた」、などと感じ、ユングのような深みにはまり、実際に殺人にまで至った例もある。

5. ユングとフロイトの違いは、どこにあるとお考えですか？

—私自身は若い頃、この転移をうまく処理できなかったために、後に、呪いの手紙を送られ、困惑した経験がある。当時私は30代前半の若者であり、相手の女性は60歳前の人であったが、恋愛性に転移をむけられ、私の「今日はもうこれでいいでしょう」という一言に、2号さんの娘であったその方が、正妻が土間に投げつけるという、2歳時の自分にしたのと同じこと私がした、誘惑して捨てたと感じられたのであった。

その後、私自身は精神分析訓練の中核である教育分析を5年間受けることになる。

しかしユングの、転移・逆転移に関する考え方は、異なる。彼はむしろこれはどうしようもなく生じる人間関係における自然な現象であるばかりでなく、患者と医師を守る坩堝(ウィニコット Winnicott でいえば、ホールディング holding にあたると思うが、)そのようなものと考えた。そうしたフロイトとユングの後の考え方の違いの発端が、この映画にはよく出ている。

これについては語り尽くせないが、ユング派には、傷ついた治療者という概念があり(Spiegelman,

1992)、1の質問に私が取り上げた、フロイトとユングの印象深い台詞の理由と根拠である。

6. アニマ・アニムス、エロス・タナトス等についての議論、もし可能でしたら、お願いします。特にタナトスは、シュピールラインの論文が契機になっているという解説もあり、興味深いところです。

—アニマ・アニムスはユング派のコンセプト、エロス・タナトスはフロイト派のコンセプトである。ただ、ユングは、自分はフロイトに反対しているのではなく、フロイトの性欲主義的な狭さを補っていると言う。それにしても膨大な展開であり、とても補いとは言えない、が。ユングは自己展開していく天才であり、また深き病者、しかも発病しなかつたニーチェだと私は考えている。

ちなみにウィニコットは、ユングはすでに4歳で発病していると言い (Winnicott,1989)、このように時代の先端まで上り詰め、自己格闘した天才を、フロイトは治せなかったと言う。書いてはいないが、ウィニコットならユングを治せたのだと思う。

タナトス、死の本能は今日ではフロイトの思弁であるとして、取り上げる人は滅多にいないが (メラニー・クラインは例外)、われわれは涅槃として、また生物の絶頂として、お釈迦様が「涅槃」に入られたというふうに理解するが、西洋人には難しいようだ。おそらくザビーナは、ユングとの解消されない関係を、転移や逆転移という心理的概念を超えて、生物学的、社会的にのり超えたのだと思う。生物は性と死により、世代を継いでいき、社会的には例えば、学問的子ども、弟子や生徒に自分の生を繋いでいく。フロイトは、この誰も受け入れないザビーナの理論を、生物学主義だとして受け入れなかった。しかし、フロイトは表面、否定したものを、後にちゃんと取り入れていく頑固で、また同時に革新的な人で、ちゃっかりして狡い、現実的な人でもあったので、影響は受けたのであろう。その頃、最愛の娘ゾフィーを肺炎で失ったことも、死の本能論への傾斜の原因だとされるが、そうした個人的なことに理論が影響を受けたといわれことを嫌がった。科学の捉え方と、了見が狭いと感じる。

加えて、私が、特に、気になっているのは、彼らの政治性です。

(1) フロイトは、精神分析学会をユダヤ人のサークルとしないために、政治的にユングを利用しようとした側面がある、という理解は、どう思われますか？

—そのような動機については、フロイトが、ユングを最初、我が息子 (プリンス) と呼んだことで、他のユダヤ人高弟達の嫉妬を刺激したという話とともに明らかである。

しかし私はそうした心理的解釈はいくらでも勘ぐれる、確定しようのない不毛なものだと思う。むしろ今回、小玉と組んで、最も勉強になったのは、例えばヒトラーの動機や心理、性格を云々しても、決して、ヒトラー的なものを明らかににはできない。つまり、今日のヒトラー的なものを阻止はできないということである。ここにこそ真の意味で、心理主義の限界があり、フロイトは神経症であり、ユングは精神病であったなどという心理主義は何の役にも立たないのである。

ライヒ Reich の、ストライキにおける人間の行動心理を心理学は扱うが、そのストライキの意味を明らかににはできない、といういい方にも通じると思う—こんなことを言ったので、ライヒは国際精神分析学会から排斥され、ドイツ共産党からも罷免され、ライヒ二重の罷免と言われる。

余談であるが、日本で初めて分析をフロイトのもとに習いにいき、実際にはライヒアンの分析を受けたのは、日本の分析家、古沢平作である。私は日本の分析の本流は、このライヒ派の影響を強く受けていると思う。ライヒの分析は一言でいえば、かつて患者が権威 (正しくは権力であろう) から押しつぶされた時点まで、患者の性格の鎧を暴き、もう一度神経症に戻るか、それと戦って直すかという選択を迫るサ

ディスティックなものである(Reich, 1933)。私が精神分析を受けたのは古沢平作の愛弟子、佐藤紀子であった。彼女はこの権威性を批判し、晩年は、分析学会内の「フェミニスト」のホープであった。それゆえに敵も多く個人的に嫌っている人もいる。私はそうした個人的なことではなく、佐藤が批判したグループの、今も持っている権威主義こそが問題だと思っているが、それはまた別の機会に譲りたい。

佐藤紀子は、当時45歳くらいであったが、まだ20代の私に、「私から分析を受けたという排斥されるかもしれないし、認められないかもしれない」と言ったが、今その意味が分かる。また佐藤紀子は、自分が先程述べたグループやライヒの権威主義から逃れられているのは、自分が被害を受け抑圧される女の側にあるからだとも語っていた。この事実を述べるのは、「私が死んだらこうした事実を公表してもいい」と佐藤から、許可されているからである。佐藤紀子は、真実に対して、とても厳しい人だった。

しかしそうした佐藤も、ライヒ派のトラウマ投与性を持った人であった。それは分析というものが根源的に持つものかもしれない。そのトラウマ投与生の中身については個人的なことに渡るので、またの機会に述べたい。こうした傷を癒すために、後に私は、10年に渡ってユング派を超えたユング派、武野俊弥の分析を受けることになる。

こうした表面からはわからない、権威性・権力性ということと、治療とは何かという問題を、フロイト、ユング、ザビーナという関係はすでに孕んでいる。ザビーナもO・アンナも後に「フェミニスト」になっている事実は今回考えたことの中で最も収穫であった。

(2) 精神分析学自体が、新しい学問だったことから、ユダヤ人や女性といった19世紀的世界のマイノリティが活躍できる領域だったと思うのですが？さらに、児童精神分析もそだったと思うのですが。

—そもそも、フロイトが精神分析に到達したのは、彼が、ユダヤ人という理由で、大学に残れなかったことである。彼は、今でもモノグラフの残っている、神経学（解剖学）のモノグラフを書いており、精神分析に達しなくても、今日の医学史に残ったほどのレベルに達していた。彼がユダヤ人でなければ、大学に残り、神経学の発達に寄与していたと思う。彼の残した論文「科学的心理学草稿」は、ニューロンの発見一歩手前まで来ており、今日、脳科学者からのフロイト再評価がなされている（小泉, 2011）。

彼は生きていくために、強迫神経症や、ヒステリーなど不明の病気を治さなければならなかった。その中で、最初はO・アンナの症例のようなヒステリー患者の催眠法による治療、そして転移性の治癒に対する反省から、だんだんカウチに横たわる自由連想法に移り、この辺りから無意識という領域に近づいていく。

フロイトがユダヤ人であった経緯は、一つの副産物をもたらす。それは抑圧された側に彼が立たざるを得なかったことである。その被抑圧感が、いずれもユダヤ人であったザビーナやO・アンナが社会的視点や児童学へと向かった要因である。

また、ユダヤ人を一律に取り扱ったのでは、ヒトラーの台頭を説明できない。ドイツ・ブルジョアジーにもユダヤ人はおり（その人々への憎しみをヒトラーはユダヤ人に集約して攻撃したのだが）、迫害された貧困なユダヤ人もいた。私は、ヒトラーの台頭は、ドイツ・ブルジョアジーが、ドイツ共産党の躍進を恐れ、対抗措置としてヒトラーに甘くし、ヒトラーの蜂起に対しても寛容で、その結果リープクネヒトやローザ・ルクセンブルクの虐殺、そしてドイツ共産党の壊滅に至ったまでは良かったが、そのことが自分たち自身の破滅への道を開いてしまったと考える。

マイノリティというより、被抑圧者であったことが、彼らの先見性と進歩性を実現した。子どもも同じく被抑圧的な存在であり、彼女達の先見性によって光が当てられた。O・アンナ（本名ベルタ・パッペンハイム）も、ザビーナも、そしてフロイトの娘アンナ・フロイトも、クラインの弟子達も、ナーサリーや

学校を作ったような、社会的視点を持っている。

(3) ユングのもつ神秘主義的側面とナチスとの親和性について、いかが思われますか？そして、もし、フロイトがユダヤ人でなければ、フロイトの理論もナチスとの親和性をもつでしょうか？

—フロイトの本を焚書するナチ、特に、文学者で宣伝担当でもあったゲッベルスは、人間の気高い精神を性に還元し、貶めたと叫ぶ。

人間の精神はもっと崇高なものだ。これは誤解と予見に基づく主張であるが、それに対して、フロイトの性欲論を否定し、崇高なものを観念的に求める、ユングの考え方は、それ自体をとると、ナチの観念的な神秘主義と親和性が高かったと思う。ドイツ民族を救う、ポーランドの出現を待ち望むという、ドイツの疲弊した事態、国家的コンプレックスが、ヒトラーをポーランドだと取り違えさせた。ワーグナーの英雄讃歌とも通じる悪しき情緒的な側面である。

(4) フロイトとユングの違いは、ユダヤ人とアーリア人、ユダヤ教とルター派、町医者とブルジョワエリート、創始者と後発者、老人と若者、そうでもない人とイケメン…といった、あらゆる面で、ユングが楽に活躍できる条件があるように思うのですが、やはり、圧倒的にフロイト理論のほうが、ユング理論よりも意義も社会的にインパクトがあったと、思うのですが。

—むしろフロイトは、これまで述べてきたように、ユングに比べて、被抑圧民族だという被抑圧性が、現代の我々に、革新的で進歩的な印象を与える。それが当時の人には、核心を突き不愉快だったのか、なかなか受け入れられなかった。フロイトはすでにユダヤという民族性を超えたコスモポリタンにまで到達していたとする Said (2003) の論もある。Marx(1844)が、「ユダヤ人問題によせて」で、「ユダヤ人の政治的解決は、人間的解放を抜きにしてはあり得ない」と述べたほどのレベルまで、フロイトは到達していた。しかし、その後のぼんくらフロイディアンや権力主義者達は、キリスト教会が、キリスト的なものと似ても似つかない権威的なものにまでなり果てたように(田川, 2001)、権力主義者だと思う。端的に言って、フロイトは社会学的であり、ユングは心理学者だと言える。

IV. 危険なメソッドとは何か

1. この映画から得る治療論的示唆

この映画の題名である、「危険なメソッド」は、ジェームズ James の、「Symbolism is a most dangerous method」から取られている(Kerr, 2012)。SymbolはSym (一緒に) とbol (投じる) という語源に分解され、バラモン教の「五体投地」や実存主義の「投企」などを連想させ、ラカン Lacan のいう象徴界は、幻想の対人関係であることも考え合わせると(松本, 2015)、すでにその中に2者関係の主体的関係を彷彿させる用語である。シンボリズムは、その方法的実践であり、その中には当然、象徴という関係性に巻き込まれる人間の関係が想定されており、恋愛においても、人を滅ぼすと同時に、また成長させる契機を含んでいる。それは譬えようもなく人を成長させる側面を持ち、危険であるばかりでなく、取り扱い注意の劇薬である。

こうした注意を無視した直面化(この語はドイツ語の原語ではauseinandersetzungであり(Bettleheim, 1984)、confrontationとは訳せない。むしろ、ソクラテス的な討論discussionに近いが)

直面化という名のハラスメント、またそれを恐れるあまり、深い関係のもつ有効性を流し去る、底の浅い人間観を持った、プラグマティックな治療の蔓延を筆者もまた嘆くものである。

危険なメソッドの登場人物の中で、フロイト役のヴィゴ・モーテンセンは見事だと思った。モーテンセンはフロイトの役作りのために、フロイトの著作のみならず、彼に関する評論も読んで、その役作りを完璧にした。これは全ての登場人物にいえることであるが、フロイト宅での撮影は、(実際にフロイトが住んでいた家は、ウィーンのパルクガッセに博物館として残っており)、その部屋が使われたことで、その場の雰囲気は神懸かり的なものになったという。

フロイト自身が生き返っても推奨すると思える程に見事であり、いかにもフロイトという存在感を作り、凡百の伝記を読むより、一見の価値があり、必見である。

ユングについては、ユング自体の全体像がまだ解明されておらず、完璧に演じているかどうか定かでない。それよりも、医者と患者という関係が、いつの間に女性と男性、いや人間が2人いるところでは、それがたとえCBTであれ必ず現れてしまう人間の関係を、クローネンバーク監督の解釈で描かせるために、かなり幅のある、不安定な役作りになっているとさえ言える。

圧巻は、ザビーナ役のキーラナイトレイである。ザビーナはフロイトやユングをすでに人間的には超えており、2人を結びつけようとし、また、観念の産物である、転移—逆転移という概念を最終的には克服し、ザビーナがフロイトに見せたとされる死の本能についての論文「生成の原因としての破壊」は、死とそこから生まれる創造性という論理において(Carotenuto, 1980)、フロイトの死の本能を超えているとさえいえる。

私は、ザビーナの存在から、治療因子としての「よき女性性」ということを考えた。それは、ウィニコットのホールディング、ピオンBionのコンテナ—containerにも通じる、女性の可能性や能力が全開したときの、治癒的な能力をさす。

2. この映画から得る社会学的示唆

この映画にザビーナのその後は描かれていないが、後にフロイト派の分析家になり、ロシア革命後の初期には、まだトロッキーが国内で存命中であり、権力の座にあったこともあって評価されたが、スターリン体制になるに及んで、彼女の建てた自由志向的な幼稚園は非公式となり、やがてスターリングラードに迫るナチスによって銃殺された (Richebacher, 2005)。私は、谷間が虐殺されたユダヤ人を埋められて丘に変わったというこの地、ロストフを訪れたいほど、ザビーナのすごさ、女性の持つ真の治癒能力、あるいは育てる力に驚いたが、(それは男性にもあるものであり、その総称として)「治癒能力としてのよき女性性」と呼びたい。

またO・アンナは、本名のベルタ・パッペンハイムとして、ドイツで切手になった、数少ない女性であるのに (田村, 2004)、ヒステリーという病者としてみると、この偉大なフェミニストを、病気が治ったとか、男性性をフェミニズムに昇華させたといった人間観からなかなか自由になれない。これはフロイトの人間観の限界である。

O・アンナは、社会学的に見れば、ドイツの女性で切手になった3人の一人という位置づけにある、優れて先進的な女性であり、社会運動家であるのに、O・アンナを心理学的に見ると、いつまでも病気の人という観念 (決めつけ) から抜けられない。

ザビーナやO・アンナを、心理学を突き抜けて社会学的観点から見ると、フェミニズムとは、女性が男性の権力性にとって代わるのではなく、男性を救うものという、質の高い真のフェミニズムにも通ずる、「治癒能力としてのよき女性性」を持つ女性たちと考えることができる。

その点では、ユング夫人のエマをして「私の夫を好きにならない女性はいない」といわしめるほど、女性を育てることのうまかったユングの特質は、人を治療するとはどういうことを考えるとき、見逃せない側面である(因みに、ユングの高弟の女性達は、Jungfrauと揶揄されたが、それは若い女性という意味にもユングの女という意味にもなる)。

武野俊弥(2015)が伝えるように、この映画はユング派の人々に嫌悪感を起こさせたというが、それは、こうした言い方を悪しき評価としか捉えない、底の浅い評価であり、その底にあるユングの育てる力、ひいては人が人を治療させる力とは何かについて、深く、自由に考えたことのない人々、治療の持つ、真の自由の獲得という目標について一顧だにしたことのない人々の戯言であろう。

この映画を見て、患者とセックスをした医者、セクハラ医者としてユングを見なし批判することは、何の益もない。また、その転移-逆転移、治療構造などに目をつけて批判するのも、後だしジャンケンのようなものであり、この精神分析黎明期の、人々の格闘を見ないものである。

V. おわりに

科学的であろうとするのは、フロイトの一貫した態度であるが、事はそれほど単純ではない。フロイトはそもそも英語では自我egoと訳されているものを、原語であるドイツ語では、私Ichと書いており、これを自我と訳すのは明らかな誤訳であり、Bettelheim(1984)も指摘するように、精神分析の本質をゆがめるものである。現在標準版とされるStrachye版の誤訳は用語の改変全体に及ぶが、フロイトは誤訳であることを知りつつ、それをあえて指摘しなかった。私Ichを自我egoと訳す事は客観的で、権威あるラテン語に移すものであり、権威化に役立つものだと身にしみて判断したからである。しかしこのことによってアメリカの精神分析学はベッテルハイムも指摘するように(Bettelheim, 1984)、「人ごと」の治療法になり、ある種の情け容赦なさを内包するに至り、哲学的には主体性なき客観主義と化したのである。

広島に原爆を落とした(正確には、その実行部隊に参加した)アメリカ空軍のイザリーは、戦争を早く終わらせた英雄として迎えられたが、あるとき自分のしたことが、どのような惨状を呈したかを、記録映画で見て、精神の変調をきたした。今日であればトラウマの後遺症と考えるべきこの事態を、当時のアメリカの精神分析は、あいも変わらぬ、エディプス・コンプレクスで解釈し、父親との葛藤に問題あり、としたのであった(多木、1999)。今日、アメリカの精神分析はほぼ滅びてしまった。これは外的には、DSMの判定基準が効果研究によって分析を効果なしと判断し、保険の支払いがなくなったことによるが、内的にはこうした教条主義(ドグマティズム)が、精神分析の命であった深き関わりを奪って、知的な理解に陥ったからである。

注1：筆者は、CBTは日本の臨床心理士が2万6千人に達した現在、長年の訓練と経験を必要とする従来の精神分析や分析心理学にくらべ、認知科学という比較的公共性があり、意識レベルで訓練がしやすい方法としては、評価している。CBTの方が科学的であるという理由で、この方法の利点のみあげるとしたら、それは科学というものを客観主義的に扱い、人間の主体をなおざりした、非科学、またブルジョア科学であり、その意味で不適切な意見であると考えている(井原、2014)。

こうした興味への直接のきっかけを作ってくれたのは、児童の社会学を専門とする小玉亮子である。小玉は社会学観点から、今世紀における先進的な文化の集約的な場所であった、世紀末ウィーンという場所に関心を持ち、その中でも精神分析学に関心を示し、また、そこでの精神分析学の分派としての、分析心理学(当時はユングの心理療法)に強く関心を持った。さらに、Reichebacher(2005)の「サビーナ・シュピールライン

映画「危険なメソッド」から読み解く治すことの意味

の悲劇」を読んでいく中で、精神療法の黎明期に、二人に影響を与えた女性の存在を知り、その女性、ザビーナが、二人の決別に深く関係していたことを知り、またさらに、近年心理学の世界で、この三人の関係を扱った、危険な関係に引きつけられた。そうした中で小玉は、さらにザビーナが児童学の領域での先駆者でもあり、児童学や児童心理学を語るに欠かせないピアジェを分析し (Reichebacher, 2005)、治癒させ、後にピアジェの影響のもと、児童心理学の学校を作っていることを知るに及んで^{注2)}、その関心はクライマックスに達した。

そうした中で、小玉が続けてきた映画を見る会である「子どもの社会学研究会」で、参加者と共に、また心理療法を専門とする筆者を交えて、映画「危険なメソッド」を見て、考察を深めていこうとしたのである。

注2：はじめこの精神分析的傾向を持つ学校は、トロッキーに承認されたのだがスターリンがソビエトロシアの指導者として権力をとると、ブルジョア的であるとして、不当にも禁止され、後にソビエトでは心理学はパブロフの条件反射学に矮小化されていくのである。こうした条件反射学が、やがてアメリカのワトソンの行動主義の心理学に極端に単純化されて影響を与え、Beck (1976) の認知療法によって多少は人間化されたとはいえ、現代では科学のお手本ともされる物理学の最先端である量子力学が、いわゆる因果律を改変し、最新脳科学も無意識を科学的に存在証明するに及んで、事実上は破綻しているのに、今なお影響を与え、アメリカで花盛りのCBTに繋がっていく事実を知るとき、スターリンなき後も続く歴史の継続と歪曲を感じるとともに、スターリンの硬直した科学観^{注3)}の悪影響は今日においても悪しき形で、アメリカを拠点に世界を支配していると感じるのである。

注3：下山は、京都大学河合隼雄を非難して「日本の臨床心理学は、(科学の体をなしておらず) 前近代的である」という(下山, 2010)。また下山と同系列の植木 (2010) も、特にユング心理学の非科学性をあげつらい、「目に見えないものは(そこに存在し)ない」とまで言い切つて非難している。これは明らかに科学という概念を歪曲し矮小化するものである。そもそも、そこには2つの敬畏が欠けている。一つは、実践的に関西の臨床家が臨床心理学の実践に果たした役割にたいする敬畏であり、もう一つは、心理学が哲学から分化独立するために果たしたその物理学自体が、量子力学の確立を通じて、その根本的な科学観を変え、因果律さえ、従来の古典的物理学では説明できない事実、また、因果律はとりわけ、心理療法の分野では逆転する。例えば、心理療法の結果、親に対するイメージが結果によって逆転し、その原因像を変えるという、真の臨床家であれば、ほとんどの人が経験する事実への敬畏と考察の欠如である。

さらに言うと、無意識を否定する暴挙である。無意識については、現代の最先端の脳科学でさえ、その評価を変えつつあり、前野 (2004) はLibet, B. (1991) の実験をふまえつつ、無意識の存在を実験的に示した。古くは無意識を、フロイトを批判しつつではあるが、Kretschmer (1950) が大脳生理学的に認めている。

分析は皮肉にも、フロイトの娘アンナ・フロイトの自我心理学ではなく、クライン派の中の、とりわけ投影性同一視による主体的な解釈として、その生々しさとリアルを残すのみである^{注4)}。

注4：こうした影響関係もまた、本当はユングとの関係から学んだ、よきものである。このことをReichebacher(2005)のように、転移と逆転移の解消と語るのは浅薄である。やがてはこうした態度が、精神分析を滅びの道に招くことになるのであろう。そこには人間学的で真に科学的な見方が欠落しているのである。

文献

- Alnaes, K. (1994). Sabina.H.Aschoug & Co., Norway. (藤本優子訳. ザビーナ. NHK出版、東京、1999.)
- Beck, A.T. (1976). Cognitive Therapy and the Emotional Disorders. Mark Patterson, New York. (大野裕訳. 認知行動療法. 岩崎学術出版社, 1990.)
- Bettelheim (1984) Ferd and Man's Soul. Vintage Books, New York.
- Bettelheim, B. (1990). Freud's Viena and Other Essays. Alfred A. Knopf, New York. (フロイトのウィーン. みすず書房、東京.)
- Carotenuto, A. (1980). Diario di Una Segreta Simmetria. (入江良平・村本招司・小川捷之訳. 秘密のシンメトリー. みすず書房、東京、1991.)

- 林道義 (1998). 図説 ユング. 河出書房新社.
- 井原成男 (2012). 心理療法4つの公理—心理療法の科学的議論のために お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 14, 39-51.
- 井原成男 (2001). 子どもの心理テスト. 小児科臨床, 54, 1139-1145.
- James, W. (1904). Philosophical conceptions and practical result. Imagin, Harvard University Press, Cambridge.
- Kerr, J. (2012) A Dengerous Method. Atlantic Book, London.
- 小泉英明 (2011). 脳の科学史. 角川書店.
- Kretschmer, E. (1950). Medizinische Psychologie. Georg Thieme Verlag, Stuttgart. (西丸四方、高橋義雄訳. 医学的心理学 I. みすず書房, 1955.)
- 前野隆司 (2004). 心はどうして脳を作ったのか. 筑摩書房, 東京.
- Marx, K. (1844). Zur Judenfrage. Deutsch-Französisch Jahrbücher, Paris. (城塚登訳. ユダヤ人問題によせて. 岩波書店, 東京, 1974.)
- 松本卓也 (2015). 人はみな妄想する. 青土社, 東京.
- 水島広子 (2013). 摂食障害の対人療法. 岩崎学術出版社, 東京.
- Likerman, M. (2001). Meranie Klein. Continuum, London.
- Reich, W. (1933). Characteranalyse. Selbstverlage des Fareffasers. (小此木啓吾訳. 性格分析. 岩崎書店, 東京, 1964.)
- Richebacher, S. (2005). SabinaSpielrein. DorlemanVerlagAG, Zurich. (田中ちひろ訳: ザビーナ シュピールラインの悲劇. 岩波書店, 東京. 2009.)
- Said, E. W. (2003). Freud and the Non-European. The Impact of New Left Books Ltd. , (長原豊訳: フロイトと非ヨーロッパ人. 平凡社, 2003.)
- 下山晴彦 (2010). これからの臨床心理学. 東京大学出版会.
- Spiegelman, J. M. 、小川捷之編訳(1992). 心理療法家の自己開示と傷つき. 山王出版, 東京.
- 武野俊弥 (2014). 私のユング派の精神療法. ユング心理学研究, 7(1), 13-29.
- 田川健三 (2004). イエスという男. 作品社, 東京.
- 多木浩二 (1999). 戦争論. 岩波書店, 東京.
- 田村雲供 (2004). フロイトのアンナO嬢とナチズム. ミネルヴァ書房, 東京.
- 植木理恵 (2010). 本当にわかる心理学. 日本実業出版社, 東京.
- Winnicott, D. W. (1989). Psycho-Analytic Explorations. Harvard University Press, Cambridge.